

山形における仏壇工芸について

内 田 秀 雄*

On the Buddhist Family Altar Manufacturing in Yamagata

Hideo UCHIDA

(1974年9月28日受理)

はじめに

わが国の伝統工芸の一つに漆器工芸がある。奈良は諸工芸の濫觴の地であるが、なかでも、もっとも伝統のあるものが、奈良漆器であろう。正倉院に残る螺鈿漆器はその最高のものでされている。この漆工は奈良より各地に広がり、その風土に応じて、特産地を形成している。しかし、周知の通り、この工芸は今日では、その製法の特殊性の故に、一部の家具、膳、盆などの高級板物に余命をつないでいるにすぎない。ところが、このような漆工のなかで、いよいよ盛行をみせ、かくれた売れ行きを示しているものに、漆工を集大成したものといわれる、わが国独自の仏壇工芸がある。わたくしは、この仏壇工芸を中心として、各地のものについて、いささか調査と研究をつづけ、若干の成果を発表してきた¹⁾。

この小論も、それらに続くもので、東北地方の代表として、山形のそれをとりあげた。

東北はわが国の文化的風土の面においても一つの地域である如く、それに相応じて、仏壇工芸においても、他の地域にみられない特殊なものがある。すなわち、山形独自の「位牌厨子」と称するものをもっているのである。

この独自のものは、東北地方の風土性、ないし宗教性に強く支えられているものであると考える。このような観点から、この山形仏壇をとりあげる。したがって、これは山形の単なる生産地理でなく、これによって、東北地方の風土性に一つのライトをあて、東北風土の一面を明らかにせんとするものである。よって、仏壇そのものには、必ずしも多く触れられていない。これが小論の目標とするところである。

歴 史 的 背 景

山形は東に蔵王、西に朝日・月山を望む馬見が崎川の扇状地に発達したまちである。正平11年(1356)出羽按察使として入部した斯波兼頼が築城し、城下町の形態を整えた。この時、最上を氏名とし、地名を山形と改めた。最上氏13代270年にわたった。義光、関ヶ原に際して東軍に属し、57万石、東北第一の大領国を形成した。城下町を整備し、繁栄をはかった。義光の孫、義俊の時、内訌(元和8年)があつて改易となり、最上氏は近江・三河に1万石、のち近江のみの5千石となり、湖東の大森陣屋にいた。山形は5藩に分けられて、明治維新まで250年間、12回の藩主の交替があり、その都度、領地は削減、縮小された。明治維新は水野忠弘(5万石)で迎えた。

山形は最上川を通じて、酒田を外港として日本海航路、瀬戸内海を迂回して、大坂・京都方面との通商がさかんであった。かくて、山形は奥羽内陸地帯における重要商業地点として発達した²⁾。

* 地理学研究室

上方の影響

元和8年(1622)酒井氏は鶴岡に城を構え、酒田に留守居を置いて、行政を36人衆に任せたので、港町として自由に発展した。寛文12年(1672)河村瑞軒、西廻り航路を再整備して、米の集散地として著名となった。西鶴の『日本永代蔵』に回船問屋鏡屋(近江屋)の繁昌ぶりが、かかっているが、享保4年(1719)大問屋48,小問屋49があった。酒田より西廻りは江戸へは東廻りよりも300里近くも遠いが、運賃が僅かながら安かったので、庄内米の大半は大坂まで送られた。

山形盆地の周辺の諸地域の特産は生糸・青苧(あさの荒皮)・紅花・漆・臘・大小豆・こうぞなどであったが、西村山郡の山村は漆と青苧の産地であり、紅花は山形が主産地で、これは寛政年間1,400~1,500駄(1駄32貫・130キロ)、全国の半を占めていた。このような特産物は、近世初期から仙台、山形、天童、酒田に進出してきた近江商人などの手により上方の塩津一びわ湖一大津を経て京に送られた。享保6年(1721)には、日野商人の進出禁止令が出たほどであった。紅花は藍とともに当時の重要染料で、上方に運んだ近江商人に紅屋を号するものが多かった。「丸紅」はその名の今に残る商社である。

みかえりとして、塩、塩魚、こんぶ、線糸、木綿、京・大坂・近江・伊勢・名古屋・江戸の古着などが山形を中継地として、仙台、米沢、若松、一関あたりまで販売された。

近江商人はその言語、風俗から、もたらす交易品の一々に至るまで、優れた上方文化に薫染していたので、土地の人びとに対して大きな魅力であったに相違ない。土地の文化は彼らとの接触によって、次第に、その水準を高めたことは疑いのないところであろう。

漆工の総合工芸である仏壇は、高い文化的基盤の上に成立する。仏教工芸の伝統は奈良・京都・彦根・長浜・金沢・高岡・長岡・山形へと上方文化伝播のルートを通じて城下町、文化中心地域へと延びていった。そして、山形はその成長の最尖端である。

城下町の形成

山形の城下町の町割は、最上義光の頃できあがったらしく、羽州街道は城に突き当って、西に開いたコの字型に曲折しているので、それに沿って、南から五日町、八日町、十日町、七日町、旅館町、六日町、四日町と町割して、町人を居住させ、その東側に蠟燭町、塗師町、桧物町、桶町、銀町、材木町などの職人町があって、諸工芸が保護せられた。その外側と城内に侍屋敷を割り付け、小白川や長町にも足軽屋敷があった。小白川から北に専称寺とその塔頭の寺町が割付けられ、市北の鳥海月山両所宮の山伏町、市南の八幡神社の社人町とともに城下の守りとした。かくて、山形は宗教の生活と密着している宗教都市でもあった。

兼頼入部のとき、9名の鋳物師がいたというのが、義光、山形城主となると、慶長9年(1604)銅町を宮町北の現在地につくって、彼らを住居せしめた。馬見ガ崎川の砂を利用して、日用品、特に仏具を多く作ったが、出羽三山には男子成人すれば、必ず詣らねばならなかったという風習から、その参詣に必要なあった錫杖、結袈裟の飾り金具(いづれも銅製)などの需要が多かったと思われる。この銅製金具が仏壇工芸に欠かせないものであり、これは次第に技術の向上をもたらした。

後日談になるが、日露戦争当時、銅町の鋳物業者が東京の砲兵工廠にでかけ、彼らは帰って、新技術を導入して、機械鋳物に転換した。これが、第2次大戦後、今日の山形の代表的工業である、ミシン工業につながるのである。城下町の形成によって、塗師、桧物、

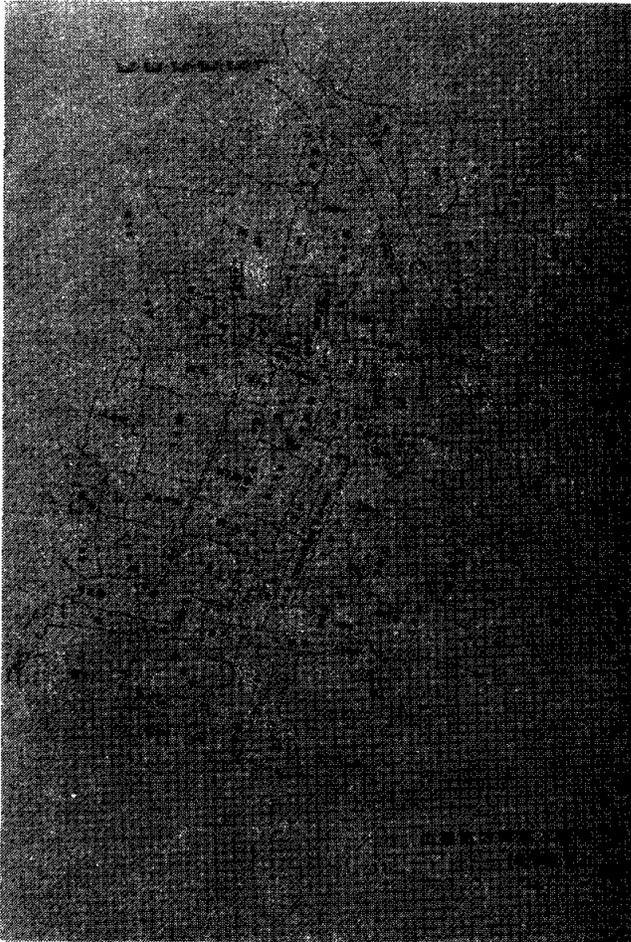


図1 山形城下町の図

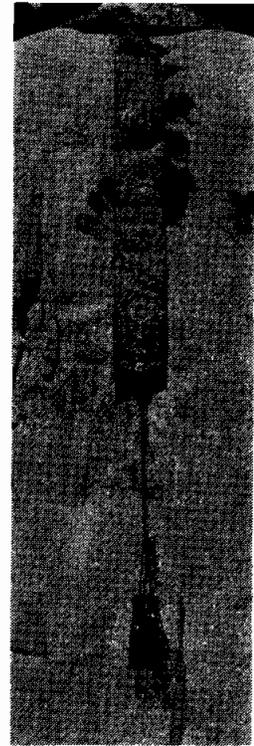


写真1 結袈裟
行者（道人）の「結袈裟」
（真言修験）後姿。
輪宝紋と洩取の金具がある。

桶、木材、銀、銅などの関連業者が集住し、既に触れた如く、原料の漆は名産であったので、仏壇工芸成立の素材はととのっていたといえる。仏壇は家屋建築と同じく漆工の総合的なものであるので、文化的背景を必要とする。それについては既に述べた通りである。しかし、これが特産地として、企業として形成されるには、それを必要とする宗教的風土があらねばならぬ。

仏 教 的 雰 囲 気

寺院の興亡は少ないものであるが、なるべく古いものとして、次の表によると、山形、福島は東北6県中、最も濃厚な仏教地域であるといえる。曹洞、真言の占有率が高いが、山形は曹洞、真宗、時宗が首位にある。曹洞は後に詳しく述べるが、葬祭と治病（祈禱）の二本立の宗派であり、東北に根強い地盤をもつ巫の呪術と妥協し、それを補足して栄えたと思われる。秋田とともに真宗も多いが、これは北陸につづくものであって、これが山形の曹洞宗の宗教儀礼に後述する如く、強い影響をあたえているのである。

山形の誇りとするところに、慈恩寺と立石寺（山寺）とがある。慈恩寺（寒河江）は行基の草創を伝え、聖武天皇勅願の波羅門僧正の開基としている。本堂は元和4年最上義俊

東北六県寺院分布表(明治34年・1901現在)¹⁾

県	天台	真言	浄土	臨濟	曹洞	黄蘗	真宗	日蓮	時宗	合計
福島	195	430	193	87	384	1	93	52	13	1,448
宮城	90	128	69	108	479	8	52	32	11	977
岩手	75	36	43	30	296	4	66	12	12	574
青森	9	15	73	6	146	3	59	30	1	343
山形	159	287	86	11	740	2	196	30	53	1,564
秋田	3	66	54	17	329	2	158	39	4	672

の再建である。山寺は貞観2年慈覚大師の開基とし、根本中堂は斯波兼頼の再建で、堂内には建立当時、比叡山中堂より移された法燈が不滅の光を放っている。元龜2年叡山焼討後、中堂の再建に当って、再び、この法燈の火を移した。芭蕉の「閑かさや岩にしみ入蟬の声」とともに世に知られ、無言のうちに山形の人びとに宗教的感化を及ぼしている。

東北における曹洞宗

旧仏教、新仏教ともに化外の地であった東北は、よく曹洞僧の面目を發揮して、諸師の来入するもの多く、早くも峨山の法弟月泉の活躍があり、正法寺(岩手県江刺郡)は後世、永平寺、総持寺と並んで曹洞三区の本寺と称せられるに至った。東西の交通、南北の連絡は健脚を誇った禅僧には易々たるものであり、要所要所はすべて彼らの手に帰し、ここに曹洞王国を建設するに至った。まさに地の利、時の利、人の利を得た結果、ここに曹洞禅の発展をみたといっても過言ではなかろう²⁾。

東海に始って、中部の山岳地帯を経て、越後、東北へと延びたことが、次表(表1)で知られる。

表1 曹洞宗寺院都道府県分布³⁾

北海道	443	埼玉	539	岐阜	263	鳥取	206	佐賀	253
青森	167	千葉	343	静岡	1,228	島根	341	長崎	157
岩手	372	東京	408	愛知	1,255	岡山	180	熊本	173
宮城	462	神奈川	310	三重	454	広島	192	大分	145
秋田	345	新潟	808	滋賀	203	山口	268	宮崎	73
山形	743	富山	218	京都	388	徳島	25	鹿児島	13
福島	477	石川	134	大阪	135	香川	5		
茨城	207	福井	295	兵庫	443	愛媛	177		
栃木	194	山梨	808	奈良	78	高知	20		
群馬	353	長野	613	和歌山	74	福岡	180		

さらに、それぞれの都府県において、曹洞宗以外の寺院と曹洞宗寺院との百分比を出してみると、次表(表2)の如くなる。

表2 曹洞宗寺院都府県百分比表

30%以上	青森, 岩手, 宮城, 秋田, 山形, 福島, 長野, 山梨, 静岡, 鳥取
10-30%	新潟, 富山, 群馬, 栃木, 埼玉, 茨城, 千葉, 東京, 神奈川, 岐阜, 愛知, 三重, 京都, 兵庫, 岡山, 広島, 島根, 山口, 佐賀, 長崎, 熊本, 大分, 宮崎
10%以下	石川, 滋賀, 大阪, 奈良, 和歌山, 香川, 徳島, 高知, 福岡, 鹿児島

岩手の54%を最高として、著しい東国的、山国的性格が出ていて、香川の0.6%を最低にして、西日本、特に瀬戸内に著しく少ない。

また、檀信徒の職業構成をみると、別表(表3)の如くである。農業が全有業の70.2%を占め、その他の有業者が全体合せて、わずかに30%に満たない。

表3 檀信徒職業表

業種	戸数	百分比
農業	914,402	70.2
商業	118,872	9.1
給与所得	83,602	6.4
自由業	78,602	6.2
漁業	35,269	2.7
その他	71,944	5.4
計	1,302,691	100

農業の50%以下は東京(36.5%)、大阪(44.4)、奈良(35.4)、北海道(40.9)であるが、東京、大阪の少ないのは当然であるが、奈良は林業(29.5)、北海道は漁業21.8がこれを補っていて、農林漁の一次産業とすれば、奈良、北海道ともに60%以上となる。古くからいわれている如く、「臨済将軍、曹洞土民」で農山地に土着している宗教であることがわかる。

以上によって、曹洞宗は山形を中心として、濃密に東北6県に浸透していることが明らかとなった。然らば、その発展の理由如何。

東北と曹洞宗

曹洞宗の地理的分布を理解するに当って、臨済、曹洞の禅風の相違について、一応ふれておく必要がある。臨済は与えられた公案について考究して、大悟徹底にいたるのに対して、曹洞はひたすら坐禅によって、心をしずめ、内面的に絶対自由の境地を体得するもので、これには公案の必要はない。道元が「只管打坐」努力生活そのままが理想であり、充実した生活を送ることを主張した¹³⁾。

臨済が貴族的趣味の主張と結びつき、有閑的な遊戯となる傾向があったが、曹洞はその傾向から地方に広まり、大衆の宗教となった。ここに曹洞が東日本の後進地に広がって行く、その教の性格からくる理由がある。

しかし、云うまでもなく、道元の思想は極めて純粹なもので、世法仏法の不二を説いたのであるが、一見甚だ出世間的なものがあつた。一般大衆とは極めて接触しがたいものであつた¹⁴⁾。

然らば、このような教がどうして大衆のものとなったか。それは教義の新しい展開にまたなければならなかつた。

單伝正直を極めた道元の宗風も登山、峨山が出ずるに及んで、民衆化の道をたどり、祈禱主義がとり入れられた。その法式も天台、真言化して益々民衆化して、一面宗風は退いたが、禅が大衆から愛せられるようになった。開祖の意としたことは、教団が形成され、それが広まらんとするならば、大宗教家の天才的境地も無知の大衆(闍提)への融合のために所謂俗化しなければならなかつた。

曹洞に先だつ臨済の勢力に比肩しうべくもなく、曹洞は臨済の殆んど省みることのなかつた遼遠の地にその活路を拓かねばならなかつた。ここにおいて、その民衆化は彼らの生活上、必要不可欠の問題であつた。かくして、曹洞禅は最も平明な呪術的な祈禱主義的となり、開祖道元の最もきつた儒・道の教をも併せ説く、誰にも受け入れられ易い教となつた¹³⁾。また、東北はこれを受け入れ易い基盤がすでにあつた。それについては後に述べることとして、禅風の俗化を具体的に今少し解明することとする。

一師相伝、師資相承をやかましくいう禅では、当然その宗風として宗祖崇拜となり、高僧寂すれば、その弟子は師徳を慕つて、塔の頭に構えた房舎に住んだ。これが所謂塔頭である¹⁴⁾。従つて、転じて山内の寺院、寺中、子院を塔頭とも云う。また、禅僧の石塔は「無縫塔」（卵塔、蘭塔）で、一般に套堂を建てた。これが塔院で、塔院の頭を塔頭ともいう¹⁵⁾。「本来無一物」を説く禅も墓を尊崇して、密教や浄土教の作法をとり入れて、15世紀頃になると葬法を完成する。在家の葬式にも関係するようになった。本来、固定資産をもたぬ曹洞は、これによって財源を得た。もともと、禅宗では出家の葬法だけがあつたが、地方豪族、農民相手の曹洞は「尊宿葬法」（出家の葬法）の単純化をなして、大衆の葬儀も行なうようになった。坐禅と葬法とが逆転して、葬法を第一として居士、大姉、信女、禅門、禅尼の戒名ができた¹⁶⁾。追善供養など本来禅のものでなかつたが、これをやらざるを得なくなり、百年忌、何百回忌をも実施するに至つた。人生の一大事である葬祭を一大事であるとした。そうして、このことによつて郷村の宗教として発展した。

圭室諦成はその著『葬式仏教』で、恵心が『往生要集』のなかに「臨終の行儀」即ち葬式を重視していることに注目している。また、これこそが、仏教の庶民化に大切なものと考えている。

これについて、思われるのは親鸞の人間観である。彼の『教行信証』の総序に「斯れ乃ち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆・謗・闍提を恵まんと欲してなり」とある。逆は五逆、謗は謗法の徒であるが、闍提は「一闍提」（icchantika）のことで、本来は「欲求するもの」の意で、快樂、現実主義者というような意味である。宗教に対して無根なるもの、ただ食つて寝て、精神的な営みをまったくもたないものをさす。親鸞が関東において見出した人間像を一闍提ということばで表現したのであろう。彼の関東でぶつかつた人間像は、ただ生きる、ただ食いのびる、ということに精いっぱい存在、そんな人びとであつた¹⁷⁾。

関東、東北に仏教が広まらんとするならば、このような人びとがどうして縁を結ぶかということである。密教的な異安心を説いたとして、晩年、親鸞が一子善鸞を、義絶しなければならなかつた、当時の関東の大衆を思うべきである。恵心の説はあくまで臨終の行儀作法で、今日の死後の葬法ではないが、生きた葬式、人をして安心して死に至らしむる作法で、最も具体的な仏教教化である。葬式こそは一家眷族一門に仏法を徹底せしめうるものと思える。曹洞禅も「尊宿葬法」を解放し、大衆と接することによつて一般化した。すなわち、曹洞禅は師資相承、墳墓崇敬を宗風とすることによつて、隆昌するようになった。ところが、このような墳墓崇敬を容易に受け入れる基盤がすでに東北にあつたのである。

出羽三山の信仰

羽黒、湯殿山、月山の出羽三山、とくに羽黒は崇峻天皇の蜂子皇子開創とし、役の行者の大峰（当山派）熊野（本山派）に対して、羽黒派として、衆徒所々に、方々に居住し

て、清僧、修験、社人、禰宜、神子ら都合7千余坊といわれて、中世に有力な武力を形成していた。史料を欠くので中世のことは明らかではないが、中世末には御師の活動が表面化してくる。

近世初期、羽黒山は寛永寺（天台）の末寺たらんとして、湯殿山と抗争したこともあったが、山上衆徒28坊は清僧山伏（真言）、麓の手向に300坊（天台）の妻帯修験がいた。

湯殿山は三山の総奥の院といわれ、大日如来修行の成就、即身成仏の地であり、阿弥陀の浄土であり「修行成就、即身成仏証得の山」であるとした。湯殿山4ヶ寺（真言）注連寺、大日坊、大日寺、本道寺を中心に、山籠修行し「即身成仏」を考えるもので、空海の入定の信仰により、仙人沢において木食行を以って、悟道の境地に至らんとした。

両山ともに行人というものがいて、精進潔斎、厳しい修行をして、道者（登山者）を案内した。湯殿山の行人には過去に暗いかげを持つ人か、社会から逃げ出した人びとで、その代りに橋をかけたり、各種の社会事業をした。彼らのなかには空海先蹤によって入定、即身成仏していわゆる即身仏となった人がいる。いずれも海号を称した。本明海（本明寺）忠海（海向寺）真如海（大日坊）円明海（海向寺）鉄門海（注連寺）鉄竜海（南岳寺）（以上6体）である。

この即身仏とは己れ自身の肉体を永久に残さんと、己れ自身で熱望している、世界に類例のない独自のものである。中尊寺以外に多数の「即身仏」（ミイラ的一种）が現存し、その習慣は11世紀以来、20世紀に至るまで綿々として続いている。これは弥勒信仰に彩られていることは事実であるが、その奥に「もっと古い時代から東北に瀰漫していたミイラ作りの習慣」があり、それが中尊寺と湯殿山ミイラと「思えてならない」（安藤更生）と主張されている¹¹⁾。

清衡の「中尊寺建立願文」に「鐘声の地を動かすごとに冤霊をして浄刹に導かしめん」とあるとのことであるが、東北開発にまつわる戦争、紛争で無実の罪によって、没した諸霊をなぐさめるための一寺を建立せんとした。

かくして、三代（清衡・基衡・秀衡）にわたって、諸堂院が建立され、都におとらぬ仏教文化都市が建設された。それらは壊滅に帰したが、しかし、今に残る金色堂は三代の寺院計画にふくまれていないもので、これらのものとはまったく別個の葬堂、つまり墳墓の一形式としてつくられたものであった。はじめ、清衡、基衡を別々に葬堂を建立する予定であったが、そうもゆかなくて、中央に清衡、右に基衡、左に秀衡、秀衡の棺中に泰衡の首級が合祀されている。

遺体を安置する埋葬法式は日本古来のものでなく、東北特有の様式をおもわせる¹²⁾。さきにも触れた立石寺（山寺）は天台宗の古刹であるが、宗派に関係なしに、古くから今日においても「歯骨納」に人びとが集る慣習がある¹³⁾。何か一連の関連性を思わせる。

東北はこのような遺物崇拜の一種異様な地域である。そして、この三山へは男子15才にして必ず初詣をした。昭和13年湯殿2万、月山1.6万、羽黒10万、合せて13.6万人が登山した。前年の12年は丑年であったので40万人の参詣があった。社寺には往々にして、干支により参詣の多寡がある。秩父巡礼は午年、富士登山は庚申であるが、湯殿山は丑年がこれに当る。湯殿へ延享2年乙丑（1745）、3万8,000人、文化14年丁丑（1817）、2万6,856人があったという¹⁴⁾。

東北一円、北関東、北陸の壇那場、霞場（壇回の範囲）から群参したのである。葬法中心の曹洞禅が受け入れられる要因がそなわっていた。あるいは、それに迎合することによって曹洞禅がのびたともいえる。

山形の漆器

漆器は山形を中心に鶴岡、酒田などに独自のものを出品していた。鶴岡は元来、武具より出発して、漆下地を用いて堅実なもので、板物の膳、盆、菓子器などで、素材にホオを用い、塗は高級で、他の追従を許さなかった。酒田は指物業に従属していたので、家具関係であった。しかし、それぞれ特色をもっていた。

慶長年間、最上義光は山形の市区を定め、さきにも触れておいたように、塗師を一区画に集住せしめて、塗師町と称し、また鞘町をおいて、刀槍その他の武器を製造せしめた。宝永の頃、一時漆工は衰微したが、安政年間には回復し、朱座もおかれた。

大正時代に山形産業十年計画を立案実施して、漆工の講習会も度々開催され講師には東京工業試験所より招聘した。山形名産紫塗の発達をみた。大正7月、県立工業試験所を設置して、漆工部をおいたが、大正12年にこれを廃止した¹¹⁾。

表4 東北六県漆器表(明治34年・1901)¹²⁾

	戸数	職工	価格(円)	1戸産り産額(円)
宮城	136	289	77,849	587
福島	362	910	330,800	913
青森	29	71	27,695	955
山形	117	261	78,395	670
岩手	73	124	20,165	276
秋田	240	517	79,825	324

表5 漆液産額(貫)¹³⁾

宮城	452
福島	1,950
岩手	3,742
青森	5,860
山形	3,136
秋田	530

(明治34年・1901)

上表(表4)によると、戸数においても、産額においても抜群は会津塗である。青森は戸数は少ないが、多額の生産があった。寛文10年(1670)以来、藩(弘前)の保護があって、蠟色仕上げの津軽塗は下駄に名声を博していた。

古来、漆液は左表(表5)の如く、ことをかかなかつた。金具は前述の通り、800年の伝統を誇り、明治34年に銅器の製品高5万4000円が記録されている。今日も鍍金作品の多彩を全国に誇っている。

山形仏壇

仏壇はそれぞれの宗派の儀軌に合うように作られる。ここは前述の通り、曹洞地域であるので、本来曹洞型であるべきである。曹洞型は素木、唐木造りを本体とするのであるが山形は、新潟につづく、真宗地域でもあるので、北陸門徒の影響をうけて、金箔塗の華麗なものになっている。ただ、金沢、高岡などの本格的真宗地域にみるような大型はない。

また、上下二段分離式となっている。この型は名古屋型であるが、東海(愛知・静岡)中部(山梨・長野)新潟、山形へと続く地域は曹洞地域であるので、名古屋型の流入かと考える。長野は京都式の小型であり、山梨はわたくしは未調査で問題を残している。名古屋型は伊勢、美濃の低湿地の熱烈真宗門徒の水害対策として形成されたとわたくしは考え

ているが、従って、型も大型なものはない。山形も名古屋流で、幅2尺、2尺5寸、3尺、3尺5寸、4尺、4尺5寸というところで、一間を二分したところに安置する2尺5寸ものが標準であろう。宮殿の柱に金箔塗の「巻竜」をつけるのが、山形壇の特徴とされている。

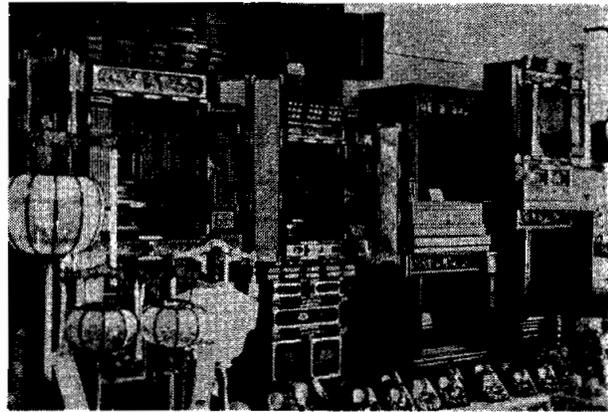


写真2 山形仏壇

右側に唐木の禅宗本来の型のものがある。
左側に真宗の影響を受けた、二段分離式(名古屋型)の金箔仏壇がある。(昭和49.8.旅籠町N店にて)

製造工程

総合漆工である仏壇は、その制作はそれぞれ分業化、専門化しているが、各地でみられる職種は普通、「仏壇八職」といわれるものであるが、ここでは下地師とか仕組師があって、他の地方に比べて分業化が進んでいる。

仏壇九職

- (1) 素地師 素材は姫小松、ヒバ(アテ、アスナロ)(耐湿性があって、膨張係数をもっとも少なく素地に適している)ホオ(朴)(春材、秋材の区別がなく、材質均等で、渋下地に適する。板物〔盆、膳、箱〕などに広く使用される良材)を用いて、外側、引出し、棚、雨戸などをつくる。以上によって堅牢なものができる。
- (2) 宮殿師 素材は姫小松、ヒバで仏壇の中心となる宮殿を作る。障子を独立して作る所もあるが、ここでは宮殿師が作る。棧を「アモダ」(いぬぐす)で作る。
- (3) 彫師 姫小松を素材として、らん間その他の彫刻をする。前述の宮殿の柱の巻竜は特産である。
- (4) 金具師 伝統ある山形金具である。
- (5) 下地師 東北一帯の漆塗は柿シブを下地に塗るのが特徴である。そのため、他所ではみられない、下地師がある。シブはマメガキという近辺に産する小粒の柿からとる(果実は東北の名産)。稲の穂で作ったミゴボークィで塗る。
- (6) 塗師 蔵王産のコウゾ紙(古来の名産)で、こした漆を塗る。ヘラ(マキ、ニレの木で作る)やハケ(京都産)で仕上げる。下塗と中塗で終わっているが、コウゾ紙でこして漆の夾雑物を全く除去して精良にしてい

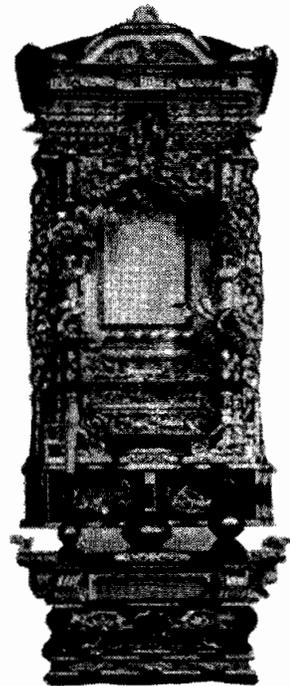


写真3 「位牌厨子」と「前机」
柱に巻竜がついてある。中央は位牌、何名かが記入される。一山口長栄作品一

るので、花塗と云ってよい、温雅、優美である。

(7) 蒔絵師

(8) 仕組師 箔押し、金具打ちして、組立てる。素地師より廻ってきたものが、ここで完成品となる。多くの場合、問屋がこれを兼ねているが、ここでは独立している。

(9) 問屋 山形市では昭和47年現在、8軒の問屋があった。それぞれ拾数軒の下職をもって、納入された完成品を販売する。

(10) その他 販路は山形を中心に東北一帯、関東、北海道が主であるが、京都にも出荷する。春秋の彼岸前後によくでるが、最盛期は旧盆の8月である。仏壇は洗濯（梅酢などで洗い修理する）に際して、製作年代が知られることがあるが、元禄、宝暦までさかのぼり、多いのは文化、文政期である。江戸時代の文化の普及と隆盛はやはり、この世界でも、この地域でも化政時代であったようである。

大都市に於ける商工業はともに、集住して同業者町を形成しているのが通例であり、山形においても旧藩時代、塗師町があった。仏壇町としては、名古屋の橋町、金沢の寺町、彦根の七曲り、山かげにひそんでいるような飯山でも愛宕町と特殊化されているが、今日の山形ではその集住性がみられない。図2の如く全市にわたって、仏壇9職が分散している。高岡もややこの形式となっているが、問屋が鴨島、松物屋町にかたまり、市の北部周辺に7職が分散している。

山形では旧藩時代よりの商店街に問屋があって、問屋とは関係なしに全市に百数十戸の専門業者が広く散在しているのが大きな特徴である。

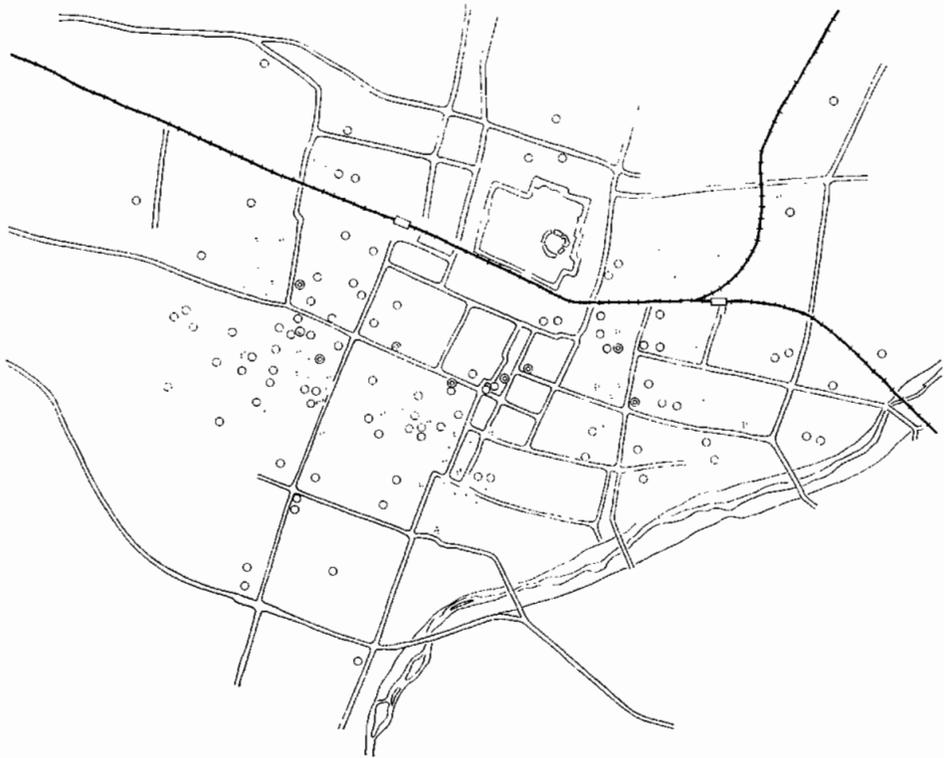


図2 山形市仏壇九職分布図
◎問屋 ○九職 □寺院

—昭和47年10月10実地調査—

専称寺などの名刹があって、その周辺が寺町を形成していて、寺院がやや密集しているが、寺院が全市にわたって分布しているのと規を一にしている。仏壇と寺院とは直接何の関係もないが、両者が全市的分布をみせているのは山形の特徴といえよう。

位 牌 厨 子

森鷗外の『山椒大夫』に厨子王が厨子に祀る地藏尊の功力で諸難をのがれる話があるが、厨子は元来、仏像、位牌などを納めるものであるが、本来、簡素なものである。ところが山形のもは、厨子仏壇とでも称すべきもので、すこぶる豪華絢爛たるもので、前机を備えた独立した位牌専用のものである。これは山形、秋田以外にはみられぬもので、出羽のものであるといえる。仏壇は本来は「仏」を祀るところで、位牌を祀るところでない。位牌は仏壇の一隅におくのが普通で、極端になるが親鸞の真宗では位牌というものはなく、メモ用とでもいうべき過去帳を一隅においておくにすぎない、礼拝、祭祀の形をなしていない。

金箔塗りの位牌は明らかに礼拝の対象であり、祭祀の主体である。それが普通は仏壇内に安置されるか、寺院に安置されることがあるが、堂の一隅におかれていくにすぎない。

ところが、出羽の曹洞宗寺院の開山堂には開山の道元像を中心に、檀信徒の位牌が左右に寺によっては数列にずらりと祀られている。その位牌はきらびやかな「位牌厨子」の中に納められ、前机があって、常に香華と光がたむけられ、礼拝供養され、一種の荘厳な雰囲気をかもし出している。開祖と同列に並ぶことは「釈迦何人ぞ」的の禅本来の教義の具体的表現として、理解すべきか。それもあろうが、わたたくしは、既に



写真4 法祥寺(曹洞宗)開山堂
—山形市七日町—(昭.49.8)
左側が檀徒の「位牌厨子」右側正面(一部みえる)に開山道元禅師をまつる。

やや饒舌に述べてきたように、この山形地域における、先祖の霊、先祖の遺体、先祖の遺物に威力的なものを認める、共感呪術的なものがあるとみたい。それは、第1表、第2表を一見すればわかるように、曹洞禅は福島、宮城、岩手の大平洋側にも濃密に分布しているにもかかわらず、この「位牌厨子」の流行しているのは、山形、秋田に限る。それも山形が中心である。秋田は山形の感染といったところである。

寺院の形式、伽藍配置にない葬堂ともいうべき平泉の金色堂に代表される東北特有の様式、それよりも増して、山形の湯殿山にみられる「即身仏」のような生のものがある。そこまで行かなくとも、位牌というものを「生身」の如く崇拜し、その加護を念ずる、東北化された、それも古来の出羽三山の修験道の精神におきかえられている仏壇の様式と考えるのである。

ま と め

わが国の大宗派である曹洞宗は諸宗におくれて弘布されて、東海、中部の山岳地を経て、東北に著しく延びた。それは道元の教を大衆化することによって可能であった。「葬式」と「祖先の礼拝」を機縁として郷村に入った。また、それを可能ならしめるものがあった。それは、ここにはすでに中尊寺の葬堂にみられる遺物尊崇の風と修験道の現身を仏とする即身仏の信仰があった。曹洞の教はそれらと一致させるものであった。近世の山形は近江商人などによる上方文化の到達点でもあって、美術工芸を成立せしめる基盤があった。また、北陸につづく真宗信仰の外延をなしている。真宗地域は先祖を祀るのでなく、本尊を祀る地域であるがため、金箔燦然たる仏壇を尊としている。この接触によって禅でありながら金箔仏壇と更に祖霊を祀る金箔位牌厨子なる特殊なものを生み出した。真宗、修験、曹洞の相互の影響によって、山形の特殊仏壇が成立した。東北化されたものが形成されたのである。

さらに一言、余言を加えるならば、最近の都市化現象のあふりをうけて、本願寺などにおいて都市墓地の堂内による立体化（無量寿堂、東山浄苑など）が試みられているが、実はこの先蹤は東北地方にあった。真宗の開祖親鸞のなきがらを加茂川のいくずと与えよといったというのは、葬法などやかましくいかなかった時代の発言で、それを今日にあてはめようとは、さらさら思わないが、前述の試みは真宗教義の曹洞化、東北化であるとみたい。

おわりに、本稿は昭和47年10月8日—10日の短時日の現地調査をまとめたものである。調査に当っては、旅籠町長門屋山口長栄店主、東北学院大学教授渡辺茂蔵博士より資料、写真その他で、即身仏など民俗学に関しては、大谷大学図書館高橋正隆司書より、それぞれ教示をいただいた。なお、調査には奈良大学辻田右左男教授にわざわざ同道していただいた。ともに、厚く謝意を表する次第である。

註

1. 内田秀雄：彦根仏壇について『大阪学芸大学紀要』13号（昭.39）。内田秀雄：飯山仏壇について『篠田統教授退官記念論文集』（昭.40）。内田秀雄：北陸に於ける仏壇工芸について『人文地理学の諸問題』（小牧実繁先生古稀記念論文集）（昭.43）。内田秀雄：名古屋の仏壇工芸について『大阪教育大学紀要』18号（昭.44）。
2. 尾留川正平・青野寿郎：『日本地誌』4（1971）220頁、以外。山形県：『やまがた』（1972）。山形県：『山形のすがた』（1972）。中川泉三：『近江蒲生郡志』巻四（大.11）209頁。
3. 山形県観光資源保存会：『奥の細道』。毎日新聞：『江州人』（昭.37）55～56頁。江頭恒治：『江州商人』（昭.48）154頁以下。太田藤三郎：「自然を染める」朝日新聞、昭和49年9月14日。古田良一：『海運の歴史』（昭.41）108～110頁。前掲『日本地誌』4。333頁。
4. 前掲『日本地誌』4。272頁、280頁。
5. 井筒雅風：『袈裟史』（昭.40）213頁、221頁。
6. 佐藤伝蔵・山崎直方：『大日本地誌』Ⅱ（明.37）481頁。
7. 圭室諦成：『葬式仏教』（昭.39）236頁に坐禅、祈禱、葬祭という三本立てで農民のなかに深く浸透したとしているが、わたくしは二本立とみたい。
8. いずれも寺伝による。
9. 鷲尾順敬：『日本禅宗史の研究』（昭.20）191頁。
鈴木泰山：『禅宗の地方発展』（昭.17）。弧峰智燾：『禅宗史』（昭.10）。辻善之助：『日本

- 仏教史』中世編之四。鏡島元隆：「曹洞先徳の芳蹤」『大法輪』第23巻（昭.34）3号などによる。
10. 曹洞宗宗務庁調査（昭.34）資料による。表2、表3も、それによって作業したものである。
 11. 渡辺宏照：『日本の仏教』（昭.33）163頁。
 12. 衛藤即応：『宗祖としての道元禪師』（昭.24）195頁。
 13. 鈴木泰山：『禅宗の地方発展』（昭.17）60～95頁。
 14. 『望月仏教大辞典』、『竜谷仏教大辞典』。
 15. 芳賀登：『葬式の歴史』（昭.45）76頁。
 16. 圭室諦成：『葬式仏教』（昭.39）129頁、236頁。前掲『葬式の歴史』79頁。
 17. 宮城顕：『真宗』846号 7頁。
 18. 日本ミイラ研究グループ編『日本ミイラの研究』（昭.44）所載。安藤更生・桜井清彦：「文献に現れた日本のミイラ」80～82頁。所載。戸川安章：「出羽三山の行人について」237～250頁。所載。小片保：「入定ミイラの解剖学的・人類学的研究」101頁。
 19. 宮本常一・外編『風土記日本』東北北陸編（昭.42）、「北方の王者」30頁以下。
 20. 前掲『日本地誌』4、258頁。
 21. 長井政太郎・小野芳太郎：「出羽三山を中心とせる宗教聚落」、『地理学評論』（昭.13）14巻一6号。新城常三：『社寺参詣の社会経済史的研究』（昭.39）824頁。
 22. 沢口悟一：『日本漆工の研究』（昭.41）72頁以下、漆工に関しては本書によるところが多い。
 23. 佐藤伝三・山崎直方：『大日本地誌』第2巻567～568頁。
 24. 前掲書。

Summary

I had already shown some aspects of the 'Butsudan' (Buddhist's homeworship altar) industry in our country in my former papers. This time I surveyed the same industry in Yamagata district, especially in the vicinity of Yamagata city. This district seems the northernmost manufacturing center in Japan. Apparently, there are many fervent believers of Soto Sect, one branch of Buddhism, in this district than any other region in Japan. They believe the immortality of their ancestor's souls, and they hope and expect the protection by unseen souls upon them.

Accordingly they piously perform their religious services for the departed souls of their ancestors, figured in 'Zushi' (small golden laquered shrine) in the temples belonging to them. To satisfy those Soto believer's spiritual demand, there occurred the Zushi industry in Yamagata, which is never found in any other region. Of course the Butsudan industry was already flourishing here, but in addition of this, peculiar Zushi industry originated in Yamagata city. There are nine big 'Toiya' or makers, and each of them has own subordinate subcontractors, which numbered about 150 families and whose works are divided in nine specialized processes in Zushi making. Assembling materials from these specialized workers and making Zushi and also selling are the lots of 'Toiya' and thus the very rare traditional home industry was established here.